

機関番号：25406

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2007～2010

課題番号：19320067

研究課題名（和文）

現代日本語感動詞の実証的・理論的基盤構築のための調査研究

研究課題名（英文）

Investigation on Modern Japanese emotives for constructing basis of demonstrative and theoretical research.

研究代表者

友定 賢治 (TOMOSADA KENJI)

県立広島大学・保健福祉学部・教授

研究者番号：80101632

研究成果の概要（和文）：次の3つの観点から成果を得た。(1) 資料の収集と感動詞の地理的変異の解明：方言区画にしたがった全国8地点での自然談話資料で「感動詞音声データベース」を作成し、全国2000地点への通信調査によって地理的変異を解明した。(2) 文法論的・会話分析的解明：個々の感動詞の文法論的記述をすすめるとともに、会話における感動詞の機能を明らかにした。(3) 感動詞の言語学的位置づけを明確にする：感動詞の言語的性格を明らかにし、どのような研究対象として存在しているのかを明確にした。

研究成果の概要（英文）：In order to understand the present situation of modern Japanese interjections and their linguistic status, we have conducted a series of investigations from the following three points of view:

(1) To clarify the national distribution through data collection

We have built a sound database of Japanese interjections using collected data of natural discourses from 8 dialectical zones. We have also clarified the distribution of Japanese interjections through a questionnaire survey conducted in 2000 areas.

(2) To conduct grammatical and conversational analyses

Through grammatical analyses, we have made descriptions of Japanese interjections, and at the same time, we have also clarified their functions in conversation.

(3) To clarify the linguistic status

We have clarified essential characteristics and the linguistic status of Japanese interjections.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2008年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2009年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2010年度	2,800,000	840,000	3,640,000
年度			
総計	10,400,000	3,120,000	13,520,000

研究分野：日本語学・方言学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：①感動詞 ②地理的・歴史的研究 ③文法的研究 ④会話分析的研究
⑤言語学的位置づけ

1. 研究開始当初の背景

音声コミュニケーションの研究が注目され始めている。どのような情報をもった話し手と聞き手が、どのような気持ちで発話するかといった発話状況を重視する研究であり、文の骨格部分の文法研究ではなく、文の伝達・表出部分を重要視する研究である。具体的な分析対象として、たとえば終助詞、感動詞、フィラー、さらには言いよどみなどがクローズアップされることになる。このような研究のためには、自然会話での使用状況を綿密に整理し、それに基づいた理論化が必須である。

本研究は、感動詞に焦点をしぼる。従来の研究では、感動詞は概念も明確でなく、さまざまな語の寄せ集めであり、「感動の意味を表わす語」といったまとめ方もされていた。研究も、その語の意味を記述することでおわっていた。近年、田窪行則・金水敏や森山卓郎らによって、談話管理理論や情報科学理論に基づいた整理が始まり、ようやく本格的な研究が始まったばかりである。ただ、内省や作例によっているものが多く、実際の言語使用現場での生々しい様相を十分には捉えきれていない。方言や自然会話に基づいた研究を精力的にすすめてつあるメンバーが集まり、感動詞の地域性について明らかにするとともに、認知科学的・社会科学的なアプローチ分析を統合して、日本語音声コミュニケーションにおける感動詞のはたらきについて明らかにしようとするものである。

2. 研究の目的

現代日本語感動詞の実態を把握し、総合的分析によって言語学的性格を解明するために、次の3つの観点から総合的研究を行う。(1) 資料の収集と感動詞の地理的変異の解明：

方言区画にしたがった全国8地点での自然談話資料で「日本語感動詞音声データベース」を作成し、全国2000地点への通信調査によって地理的変異を解明する。(2) 文法論的・会話分析的解明：個々の感動詞の文法論的分析によって、現代日本語感動詞の体系を明らかにし、会話における機能を明らかにする。(3) 感動詞の言語学的位置づけを明確にする：感動詞の言語的性格を明らかにし、どのような研究対象として存在しているのかを明確にし、言語学的位置づけを明らかにする

3. 研究の方法

(1) 資料収集と感動詞の地理的変異の解明

現在までに、札幌・弘前・東京・名古屋・大阪・広島・松江・奄美・沖縄の合計7地点で、女性話者3~4人による自由談話資料を収集し、質問調査も弘前・広島・長崎・奄美・沖縄の合計5地点で行っている。さらに、2010年度に全国2000地点への通信調査を実施した。

(2) 文法論的・会話分析的解明

文法論的研究では、個々の感動詞、特に応答詞について、「いいえ」と「いいや」など否定応答詞の意味を分析する作業を進め、体系が明らかにしようとしている。肯定の応答についても、「うん」と「はい」「そう」を含む意味体系が明確になっている。フィラーについても、その用法や意味分析が進んでいる。また、認知的な観点からも考察が進んでおり、理解と発話産出の関係からの分析も進みつつある。

(3) 感動詞の言語学的位置の明確化

これは、最終的な結論になるものなので、継続して考察中であるが、現場性・体験性に基づいて感動詞を位置づけようとする視点と、副詞との関係や、感動詞の独立性、後続要素との関連性などから、従来、〈独立性〉が強調されてきた感動詞を、「立ち上げ詞」として捉えるという重要な視点が提示されており、その実証に向けて、今後も継続的に研究がされつつある。

また、感動詞を含めたパラ言語の全体像を明らかにし、その視点から考察していく必要性も提起されている。

4. 研究成果

(1) 資料収集と感動詞の地理的変異の解明

現在までに、札幌・弘前・東京・名古屋・大阪・広島・松江・奄美・沖縄の合計7地点で、女性話者3~4人による自由談話資料を

収集し、質問調査も弘前・広島・長崎・奄美・沖縄の合計5地点で行った。現在その資料の整理中であるが、すでに、否定応答詞については、言語類型論的な観点からの分析が進んでおり、そのバリエーションのタイプから、種々の語形によって意味的なニュアンスを表現する「語彙型」、後ろに続く述部で表現する「単一型」、そしてその中間的な性格をもつ「中間型」の3類型になるのではといった成果が得られており、「単一型」は周辺地域に分布している可能性が高いとの、分布についての仮説もできている。全国2000地点への通信調査結果は、担当の東北大学が震災で影響を受け、整理が遅れている。

(2) 文法論的・会話分析的解明

文法論的研究では、「いいえ」と「いいや」など否定応答詞の意味体系が明らかにされつつあり、肯定の応答についても、「うん」と「はい」「そう」を含む意味体系が明確になっている。フィラーについても、その用法や意味分析を進めた。また、認知的な観点からも考察が進んでおり、理解と発話産出の関係からの分析も進めつつある。

(3) 感動詞の言語学的位置の明確化

これは、最終的な結論になるものなので、継続して考察中であるが、現場性・体験性に基づいて感動詞を位置づけようとする視点と、副詞との関係や、感動詞の独立性、後続要素との関連性などから、従来、〈独立性〉が強調されてきた感動詞を、「立ち上げ詞」として捉えるという重要な視点が提示されており、どのように後続する要素と関連するかの実態把握等、その実証に向けてさらに研究がされつつある。

(4) 論文集の出版

上記のような研究成果をまとめ、『感動詞の言語学』(ひつじ書房)という論文集を、2012年秋に刊行できる予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計12件)

- ① 小林隆「オノマトペの地域差と歴史―「大声で泣く様子」について―」, 『方言の発見』, ひつじ書房, pp. 21-47, 2010, 査読無
- ② 小林隆 日本における方言調査・記録の現状―「消えゆく日本語方言の記録調査」の取り組み―, 『新国語生活』20-3, pp. 48-63, 2010, 査読有
- ③ 小林隆・澤村美幸 言語的発想法の地域差と歴史『国語学研究』49pp. 1-14, 2010,

査読有

- ④ 定延利之 会話においてフィラーを発するということ 『音声研究』14, pp. 27-39, 2010, 査読有
- ⑤ 友定賢治, 応答詞の地域差, 『方言の発見』, ひつじ書房, pp. 49-65, 2010, 査読無,
- ⑥ 友定賢治 感動詞の日中対照研究に向けて『日本のことばと文化』 溪水社 pp. 354-363 2009 査読無
- ⑦ 串田秀也 「理解の問題と発話産出の問題―理解チェック連鎖における「うん」と「そう」―」, 『日本語科学』, 第25号, pp. 43-66, 2009 有
- ⑧ 小林隆 談話表現の歴史, 『日本語表現学を学ぶ人のために』 pp. 188-211, 2009, 査読無
- ⑨ 友定賢治, 否定応答詞の方言間対照, 『音声文法の対照』 ひつじ書房, pp. 79-91, 2007, 査読無,

[学会発表] (計19件)

- ① 定延利之 [招待講演] コミュニケーションと言語における「体験」, 日本認知科学学会第26回大会, 2009年9月10日, 慶應義塾大学
 - ② 定延利之 日本語音声コミュニケーションにおける信念変更を顕在化させる感動詞の義務性, 電子情報通信学会, 2009年5月15日, 沖縄産業支援センター
 - ③ Shuya Kushida Confirming understanding and appreciating assistance: uses of nn-type and soo-type tokens in response to understanding check in Japanese conversation. , Poster presented at 11th International Pragmatics Conference, 2009, Melbourne
 - ④ 友定賢治 日本語否定応答詞の構造と分布, 中国日語教学研究会, 2008年12月14日, 広東外語外貿大学
 - ⑤ 定延利之 感動詞ときもちの結びつきの明確化に向けて中国日語教学研究会, 2008年12月14日, 広東外語外貿大学
 - ⑥ 友定賢治・高木千恵 方言の習得―大阪市生まれの幼児の感動詞習得―, 第85回日本方言研究会, 2007. 11. 16, 琉球大学
- [図書] (計1件)

友定賢治編,『感動詞の言語学』,ひつじ書
房,頁数未定,2012年秋に刊行予定
〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況(計◇件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

友定賢治 (TOMOSADA KENJI)
県立広島大学・保健福祉学部・教授
研究者番号: 80101632

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

定延利之 (SADANOBU TOSHIYUKI)
神戸大学大学院・国際文化学研究科・教授
研究者番号: 50235305

小林 隆 (KOBAYASHI TAKASHI)
東北大学大学院・文学研究科・教授
研究者番号: 00161993

串田秀也 (KUSHIDA SYUYA)
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号: 70214947

富樫純一 (TOGASHI JYUNICHI)

大東文化大学 ・ 文学部 ・ 講師

研究者番号: 50400619